

平成23年度 青少年愛護審議会（第1回） 議事概要

開催日時 : 平成23年12月1日(木) 14:00~16:05

開催場所 : ひょうご女性交流館5階501会議室

出席委員 : 13人

今井会長、北野委員、小林委員、重本委員、津久井委員、中川委員、仲田委員
野々山委員、林委員、速水委員、村田委員(代理:山根氏)、矢橋委員、山中委員

議事

・新委員の所属部会指名

会長から中川委員を政策部会、重本委員と矢橋委員を愛護部会に指名。

(1) 有害興行(映画)の指定(報告)

(会長)

有害興行の指定について、事務局から資料の説明をお願いします。

(事務局:資料説明(資料1))

(会長)

このことについて、なければ次の議事へ移ります。

(2) 指定図書類審査団体の所在地変更(報告)

(会長)

有害興行の指定について、事務局から資料の説明をお願いします。

(事務局:資料説明(資料2))

(会長)

このことについて、何かご意見はありますか。なければ次の議事へ移ります。

(3) 今後の青少年施策の検討について(意見交換)

(会長)

今後の青少年施策の検討について、事務局から資料の説明をお願いします。

(事務局:資料説明(資料3、別冊、参考資料))

(事務局)

配布冊子(「ひきこもり当事者のためのQ&A集」(編集:ひょうごユースケアネット推進

会議)及び「不登校をめぐる55の質問」(発行:県立神出学園)については、ひょうごユースケアネット推進会議座長、並びに県立神出学園学園長を務めておられる小林委員からご説明いただきます。

(小林委員:資料説明(冊子))

(会長)

事務局並びに小林委員から説明をいただきました。ここからは、対応すべき青少年の問題について、個別のことで結構ですのでこれから皆さんのご意見をいただきたいと思います。

(委員)

基盤づくりという点から、「ひょうご青少年社会貢献活動認定制度」に関心を持っています。やはり若者、青少年がいろいろと活動していることを社会的に認めてあげるといった形のものが重要ではないかと思います。この制度は今年になってから開始されたのですか。

(事務局)

昨年からです。

(委員)

昨年からは開始されてまだ成果がそれほどあがっていないということですが、平成22年度は27名に認定証を出したけれど、企業や団体に採用された人がいないことは残念です。実は、最近大学も一般入試のみで入学させるのではなく、多くの私立大学では入学者の40%くらいが推薦入試での入学になってきています。多いと思われるかもしれませんが、ほとんどの大学で40%くらいを方針にしています。「ひょうご青少年社会貢献活動認定制度」は今のところ企業・団体等で採用・利用してもらうようになっていますが、大学の推薦入試にも利用してもらうといいのではないかと思います。

そして、社会貢献活動を人材育成のキャリアとしてつなげていくような仕組みが大事だと思います。例えば、NPOが非常に盛んなアメリカでは、大学や美術館、図書館もおおかたNPOが運営しています。日本のNPOとはちょっとニュアンスが異なりますが、社会に深く根付いています。そこで重要なことは人材の確保ですが、どういうふうに入材を育成しているかということです。

大学を卒業したからいいところに就職できるわけではなく、むしろNPOでの経験をどういうふうに分がキャリアアップして積んでいったか、ということが就職の時に非常に有利になっているというのが、アメリカの今の動きになっています。

そういう意味で「ひょうご青少年社会貢献活動認定制度」はこれからだと思いますが、もっと周知啓発してやっていけばいいと思います。

ひきこもりの人も個々に問題があるのですが、こういう活動に参加できるのであれば、学校に行くよりもいいことかもしれません。選択肢を広げる一つの制度としてもいいかなと思います。強い関心を持っています。頑張ってやってほしいと思います。

(会長)

アメリカでは就職の時に、社会貢献をしてきた人を優先してくれるような雰囲気が出てきているというお話がありました。私たちが青少年を認めて、青少年がその認められたことを誇りに思いながら次のステップに進む、というような雰囲気が今の日本の社会にはあると思いますか。

(委員)

とても難しい問題です。私の会社にも毎年いろいろな人が働きたいと来られます。見ていて魅力的だと思うのは、ペーパーテストの結果よりも数字などでは表すことができない部分です。どういう経験を積んできたか、あるいは学校の勉強以外のところでどういう鍛錬を積んできたかです。こちらとしては一番見えないところ、すなわち、学校の成績で表せない魅力を若い人から見たいし、評価をしたいと思っています。今の日本の社会だといまだに数字あるいは偏差値などのものさしで測られる傾向が強いですが、そこから外れてくる経験などの部分がどう評価の対象になっていくかということが、若い人たちの閉塞感を破っていく大きな入口になるだろうなと思います。

(会長)

今の若い人たちがどんな社会を待っているのか、将来にあたり自分にとって何が大事であったり、誇りを持てるようになるのか、このようなことについて何かあればお願いします。

(委員)

(財)日本青少年研究所の調査では、日本の高校生の約66%が「自分はダメな人間だと思う」と答えたというデータがあります。自分はダメな人間だと高校生が思っているということは、年齢を重ねて成長すればそれが解消されるかといえばそうではありません。そうするともっと小さな頃、幼児期・小学生期に、何が子どもにとって大切なのかということを考えていかなければならないと思います。その積み重ねの中で教えたことがキャリアとして生かされてくるのだと。それは就職のための手段ではなく、自分を磨くための手段であって、その結果が自分の将来にも結びついていくということにならなければいけないと思います。

先ほどの資料説明に関して3点質問します。

一つ目は、ひきこもりに関してです。ひきこもりにならないためには、子どもが小さな時に何が大事なのかということをお聞きしたい。我々が広報して伝えていかなければならないと思っています。そのあたりのことをお聞かせいただければと思います。

二つ目は、「子どもの冒険ひろば」「若者ゆうゆう広場」についてです。これらは行政から支援を受けて、子どもたちのいろいろな体験の場を持たれているわけですが、基盤の弱い団体への県からの支援がなくなると、せっかく培ってきた憩いの場があるのに団体そのものがなくなったり、やめてしまうのではないかと思います。基盤強化・自立支援のためにどのような手立てを考えて取り組まれているのかということをお聞きしたい。

三つ目は「子どもの遊び場・若者の居場所づくり活動の支援強化」についてです。これは今年で終了だと言われました。現実に国の緊急雇用制度で働いている若者が多いのですが、この制度の雇用期間は1年です。主催者は人件費の支援を受け1年だけでも働きに来てくれればありがたいと思うのですが、働いている若者が意欲を持って1年で終わってしまう。そうすると、こういう仕組みを活用することが果たしていいのかなと疑問に感じるのですが、いかがでしょうか。

(事務局)

二つ目と三つ目のことに関してご説明します。

基盤の弱い団体は基本的には県から助成がなければしばらくの間はつぶれてしまうということについてどう考えているかということでした。この「冒険ひろば」「ゆうゆう広場」はどちらも平成15年から始めましたが、当初は、5年間のパイロット事業として県が立ち上げの経費や運営経費を補助するので、その後は自立してください、という趣旨で始めました。そういう趣旨もあって現在、自立しているところもありますが、うまくいっていないところも出てきています。

このような状況を見て、うまくいっていないところにこれまでと同じように県費を使って助成していくことは基本的にはどうかと思います。今議論しているところですが、単なる助成ではなく、核となるところにもう少し助成をして、中間支援をしていただくような形、例えば、

弱いところを助けるために助言したり、プレーリーダーの支援をしたりなど、団体同士で助け合っていただくような支援の形を考えています。「冒険ひろば」も「ゆうゆう広場」も今のところ助成は考えていますが、単なる運営費助成ではなく、新たな立ち上げに要する経費や行動経費、先ほど申し上げた相互機能を持った取り組みなどに対して助成していこうと考えています。今は、検討中ということにさせていただきたいと思います。

それから緊急雇用もそうですが、2年間やってきた活動支援強化事業は緊急雇用事業ですので、ご指摘のとおり制度上予算はなくなります。しかし、先ほど申し上げたとおり予算がなくなったからそれで終わりではなく、形は異なりますが現にある団体に中間支援機能を担っていただいて、強化事業や支援員に代わる役割も果たしていただくようなことを考えています。

(委員)

「青少年補導活動の推進」について意見します。私は地元市で補導の会長、県で副会長をさせていただいています。県の助成金の話が先ほどありましたけれど、兵庫県青少年補導委員連合会に対する助成金がかなりカットされています。補導委員が環境調査等を頑張っているにもかかわらず、今年は助成金がカットされて予算がないと言われました。これまでも助成金を減らされて予算が少ない中でもそれ以上に一生懸命活動してきました。しかし、補導活動はやはり助成金あってのものだと思います。だからこれ以上助成金をカットされると活動がやりにくくなるのですが、もう一度お考え直していただけないでしょうか。このことは、別途、県補導委員連合会から県への要望としても出させてさせていただいています。

(事務局)

助成金の予算額に関するご要望ですので、今ここで直ちにご回答申し上げられませんが、ここ2、3年に関して言えば県から兵庫県青少年補導委員連合会への助成金額は定額を保っています。委員ご指摘の今年助成金が減ったということについては、内容を後ほど詳しく教えていただきたいと思います。ただ、基本的に補導委員の設置については、県が設置しているのではなく、市町が直接委員を委嘱して設置しています。しかし、補導委員にとっては県からの助成金だろうが市からの助成金だろうが同じことだとは思いますが、その辺りの関係を良く調べてご報告させていただきます。いずれにしても青少年課としては、予算額をしっかりと確保して助成していきたいとは思っていますが、これは努力させていただくというお答えでご了承いただきたいと思います。

(会長)

予算をカットしなければならない状況の中で、県の方でいろいろとアプローチしていますが、それにもかかわらず子どもたちや若者たちが問題を抱えるようになっていきます。何をすれば一番効果的なのだろうかということが重要になってくると思います。

(委員)

青少年(こども・若者)施策体系表の中に「スポーツクラブ21」が記載されていますが、各市町に聞いたところ地域ではすでに衰退してしまっていて、もはや青少年・子どもたちは関わっていません。子どもたちはこれまでのこども会の活動によって野球大会などをするし、中学生は学校の部活動でスポーツをする。高校生になると参加する余裕はありません。

「スポーツクラブ21」を始めた時に、私は地域性があるので例えば子ども会が活発に活動していて各施設が満杯のようなどころには、後からそういうものを作ったらかえって邪魔になるだけであり、それが出来ていないところにされるのであればいいけれど、画一的に予算を配分するのはいかがなものかと担当の副知事に申し上げていました。始めは自治会ぐるみでしたから100人以上のところもありましたが、どんどん人数が減って、かろうじて役員だけになってしまったところがほとんどです。副知事に度々申し上げた結果、「スポーツクラブ21」

はやめになって県民交流広場になったのです。現実「スポーツクラブ21」は、ほとんどの市町で大人の役員だけが義理で残っているような形になっていて、子どもは参加していません。事実を確かめてそれでも市町で子どもが参加しているところがあれば体系表にお書きになればいいですが、実態と異なることを書いてはいけません。

それと、「こころ豊かな人づくり500人委員会」についての意見です。これが最初にできた時に問題になったのですが、当時の知事がたくさんの予算をお出しになられました。しかし、同じ講師を呼べば婦人会なら1000~2000人集まる講演会に、500人委員会では50~60人しか集まらないので婦人会に人集めの依頼をされるようなこともありました。私たちには予算をくれないのに、人数の少ない500人委員会にはたくさん予算をあげるの、婦人会の会員から不満の声が出ました。そこで、私から役員会の際に知事に申し上げましたところ、知事はその時、人材育成のためにはマンツーマンでも私はたくさんお金を出すとされました。

4~5年前に、ある会議の時に500人委員会の方が、県に500人委員会の同窓会をしてほしいと要望されていました。私は、それは違う、500人委員会が同窓会を必要とするのであれば、自分たちでもっと広げていかなければいけないのではないかと思います。だから500人委員会をもう一度見直してほしいと思います。とても失礼な言い方ですが、500人委員会は地域の核にはなっておられません。

(委員)

これまでの各委員のお話をお聞きして思ったことを申し上げた上で県にお願いしたいと思えます。

皆さんも同じだと思いますが、この青少年(こども・若者)施策体系表の資料(資料3別冊)を二つ見て、今はやりの仕分けの一覧表のように見えました。いわゆる事業仕分けはこのような資料を作って片っ端からやるわけです。国がどのような意図でこういった基本方針を成立されたのかはよくわかりませんが、ああやってデリケートな問題もそうでない問題も十把一絡げにして乱暴に仕分けするというのは、少なくとも青少年の施策にはあまりなじまないのではないかと思います。しかし、国の事業仕分けのようなことは対岸の火事ではなく、何も努力しないでほったらかしておくと、ここにも到来するかもしれません。仕分け人が来る前に、きちんと整理をしてアピールが出来るようにしておくことが大事ではないかと感じました。

例えば、「スポーツクラブ21」と「500人委員会」の例が出されましたが、これらはまさにアドバルーン的な事業だったと思うのですが、これらについて一回作ったからどこまでやるのか、というご意見だったわけです。

一方で青少年補導委員の活動というのは、陽が当たらないけれど絶対に必要なもので、これからはずっとやっていかなければならないものです。これこそ仕分けしてはいけない部分の活動だと思うのですが、話を聞いていると、やるべきことが縮小されて、必要かどうかわからないことが惰性で続いている、ということがあるのかもしれないと思いました。せっかく体系表を作ってきたのであれば、これらを生かす施策を今年度お願いして、仕分け人が来た時にはうちは終わっていますと言えるようにしていただきたいと思えます。

もう一つ、「ひょうご社会貢献活動認定制度」について企業側の観点で申し上げたいと思えます。就職をしたい青少年が社会活動や公益活動に価値を見いだしてもらうための動機付けも当然大事だと思いますが、一方で企業の方にもそういうことがないといけないと思えます。先ほどアメリカの例が出ていましたが、私もこのあいだアメリカではCSRにどれだけ取り組んでいるかで企業の格付けが変わるという話を聞きました。例えば、同じような新聞社が横並びしていても、新聞社は社会活動をしているから格が上で、ただ売っているだけの新聞社は格が下になるといった感じです。これは市場の論理で、格の低い企業は淘汰されて、社会全体で公益性のある活動をしている者に価値を見いだしているということです。

弁護士の業界でも同じことが言え、格の高い法律事務所はそういった公益活動を一生懸命やっているところで、単に営業だけをしているようなところは格が低いというようになっていま

す。だからロースクールの優れた人材は格の高い事務所に行く、というのが当たり前なのだそうです。

そういうことからすれば、「ひょうご青少年社会貢献活動認定制度」というのは素晴らしい制度だと私も思いましたので、もっと生かしていただけたらと思います。

ただ、こういう認定制度をする時にありがちなのが、参画した企業・団体は非常に良いと認定だけしてほったらかしになるということです。認定した後、せっかく参画した企業・団体を生かせる何かがないとあまり意味がありません。今の予算の限られている中では助成金や優遇措置だとなかなか難しいので、むしろ広報活動のようなことを県が肩代わりするようなことはできないでしょうか。今は認定された企業・団体をホームページで単に掲載しているだけだと思いますが、例えば、これだけ貢献している事業をやっているということアピールできる場を設けてあげたり、代わりにホームページで紹介してあげたり、あるいは地域の活動をする時にはこういう企業・団体がこういうことを頑張っていますよと一言書き添えてあげるなどしてあげてはいかがでしょうか。

そういうことで企業の価値が高まると同時に、企業もこういう人材が欲しいなと思うようになれば、社会貢献活動をする人たちの就職も広がるということになるのかなと思います。ぜひ「ひょうご青少年社会貢献活動認定制度」を一層推進していただきたいと思います。

(委員)

これまでの議論をお聞きして私なりに思ったことを述べさせていただきます。

「スポーツクラブ21」や「500人委員会」の話が出ていますが、いろいろな経緯があってやめられないという事情もわかるのですが、せっかく忙しい中皆さんに集まっていたいでいるわけですから、こうした審議会ですら毎回話していることを一度真剣に議論していただいて、結果は別としてぜひ次の審議会くらいで、こうだからやはり必要なのだとか、一度検証していただくことが大事なのかなと思います。きちっと答えなければいけない機関ではありませんが、ただ審議会ですら聞いておけばいいというのではなく、一度そういうことをお願いしたいと思います。

先ほど、(財)日本青少年研究所の調査で、約66%の人が「自分はダメな人間だと思う」と答えたという話がありました。これは教育委員会の人に言うとあまりよくは思われませんが、俗に言う親学と言われる分野でよく議論されていることです。子どもを褒めない、あるいは勉強しなさいとかあなたダメだねとか試験の点数悪いねとか、こういうのがどちらかという日本の教育になっていますが、自分をダメな人間だと思わない、自分は出来る人間だと思えるようにするには、あなたはよく出来るねとか褒めることが大事ではないかなと考えています。違った理解をしていただいたら困るのですが、埼玉県ではたしか2億円近い予算をつけて発達障害と言われる子の障害を治すことと兼ね合わせてそういうこともされていますので、ぜひ一度研究していただければ嬉しく思います。

(会長)

これまでのお話の中で、県がいろいろなことをやっておられるという報告を受けてまいりました。しかしそれにもかかわらず、今の時代は子どもたちが自分というものをどこかに見失ってしまって、私は何もできない、だから私はダメな人間だというようなことになってしまっています。

こうした青少年をどうするかということが問題です。やはりどこかでもう一度、こんなことをしたら喜んでもらえたという自信を確認する方法を考えるということが一つの大きなテーマになっているような気がします。いくら仕事を増やしてプログラムをやってもそれだけではダメだと思います。一人一人の人間が何か自信を持てるような社会を作らないといけないと思います。先ほどのお話で言えば、会社が学校の成績もさることながらその他にしていることについて評価をするというものがありましたが、それは大変いいことだと思います。

評価をするということに関して、昔、大きな会社の重役さんが、私どもがキャンプをしている時に来られて非常に感激されて、以来、毎年のようにキャンプを視察に来られるようになりました。そして最後には、このキャンプのリーダーをしている人なら卒業の時に無条件で私の会社に入れたいと思う、ということまで言ってくれたことがあります。

最近のアメリカの人たちが言っているのは、カウンセラーとかインストラクターなどのリーダーシップではなく、チューターのようなリーダーシップを発揮している人が少なくなったということです。何か作業をしたりプログラムをしたりしている時に、一緒になって泣いたり笑ったりして人間を育ててくれるような人が現在少なくなっています。

リーダーの育て方にしても、今は500人もの人を集めてそれぞれがリーダーシップを持ってやってくれてはいますが、例えば、誰か一人が悩んだ時に、その人と一緒におまえなあと言いながら一杯飲みながらでも話をしてくれるようなリーダーがだんだん減ってきているのではないかというようなことが、大きな社会問題になっていると思います。

もう一つ私が大事だと思うのが、2030年になったら日本は世界一の超高齢化社会になるということです。今日本では100歳以上の方が5万人いるそうです。20年経てば100歳以上の方が27万人、50年経てば50万人になるそうです。世界の人口は増えていますが日本の人口は減っている状況です。超高齢化社会になると65歳以上の人、言い換えると体力的に子どもの相手を出来ない人の数が総人口の1/3になります。若い子どもたちを誰が抱きしめながら仕事をしていくか、ということがますます問題になってきます。

ではどうすればいいかという問題ですが、そんなことを役所に頼んでもダメですね。近頃おかしいと思うのは、福祉でも昔の人は民生委員と言えば名誉職でした。今の方は小遣いももらっているとまでは言えませんが、だんだん身銭を切っておられる民生委員がいなくなってきたと思います。そういう形が本当にいいのかどうか問われていると思います。

また、一つ一つのプログラムの中でも成功しているものがどれかを検証する必要があるのではないのでしょうか。「スポーツクラブ21」にしても全てがダメなわけではなく、どこかでいいところもあるかもしれません。ここはなぜいいのか、ここはどういう理由で失敗しているのかについて探してみる必要があると思います。

私もひきこもりの子どもたちを60年も前に預かったことがあります。キャンプに連れて行きました。キャンプってたくさんありますね。今一番長いキャンプって何日くらいですか。

(委員)

自然学校で5泊6日です。

(会長)

日本なら長い方ですね。レクリエーションとして参加するキャンプであれば2泊か3泊でも十分だと思います。人間が他の人間とふれあって協力しあったりとか、あるいは何もできないと思っている子どもたちが何かできるようになるとか、そういう効果を期待できます。

褒めることが大事だという意見がありましたが、以前、障害を持った子どもたちにアーチェリーをさせたことがあります。その時、ある子どもが真ん中に当てました。それを褒めたら、その子どもが、私アーチェリーに自信があるからまたさせろと言うのです。またさせても真ん中に当たるはずがありません。だから、風船を畳一枚全部に貼り付けて、的を射させたのです。するとどれかには当たるので、よく割れたなあと言って褒めるのです。

例えば、そういう苦労をするリーダーたちがそばにいればそのグループは成功します。一方で、アーチェリーをしよう、当たったな、今度はダメだったなでは、リーダーとしては当たり前のことなのです。子どもたちがちょっとしたきっかけをどうつかむかということは、私たちが考えなければならぬ課題だと思います。子どもは褒めることで自信がつくと思いますし、会社などでもそういうことのできるようなスタッフがいたら、たいいてい自分のチームが違ってくるのではないのでしょうか。

どんなプログラムを立てるかということを中心に考えるよりも、やはり少くくらい数が減ってもいいからこういうリーダーたちを育てること、そしてリーダーが地域の中から子どもたちを見つけてくるような仕組みが大事ではないかと思ひます。そうでなければ、プログラムはどんどん増えるけども、2～3年したらあまり効果がなくて消えていくということの繰り返しになるかもしれませんが。

子どもたちはみんな褒められると自信を持つようになって、僕は世界で一番これがうまいなんて思ってしまうものです。今あるプログラムをこのようなリーダーと子どもたちの間に組み替えるような方法を考える必要があるのではないのでしょうか。「500人委員会」だから500人集めたらいいのではなくて、リーダーが本当に親身になって自分の周りの10～20人の子どもたちのためにやれるか、あるいは「海外養成塾」のことを書かれていますけど、そういう中で鍛えるリーダーシップとは何か、ということを考えることがある意味では必要になってきたのではないかと思ひます。

今日は県からいろいろなプログラムをご報告いただきました。委員の先生方からはただプログラムを作っただけではダメだよ、あるいは、ただ予算をつけたからといってそれでうまく進められるようになるかと言えばそうではない、というお話をいただきました。また社会貢献というのは、活動して下さった人々たちへの感謝・評価をすることが重要であると思ひますし、同時に活動した皆さんが立派なリーダーになることに期待しています。

他に、この頃の青少年たちの印象などはございませんか。

(委員)

会社にいる人間としてお話ししたいと思います。私もあと数年で定年を迎えますが、若い社員を見ていて、本当に最近の20歳くくらいの社員というのは大変だなとつくづく思ひます。鬱病になったりメンタル系の問題を抱えたりする社員は、どこの会社の方にお聞きしても大変多いと聞いています。

このような中で、30年以上前になりますか、私が会社に入った頃は、先輩の課長や部長は非常にかっこいいというか、当時からただのおじさんと言えばおじさんなのですが、やはり何らかの一抹の憧れみたいなものがありました。一緒に飲み連れて行っていただいたり、いろいろな店に連れて行っていただいて、上司の振る舞い方を見るのが非常に勉強になるという思ひがありました。最近の若い社員という我々が誘ってもつきあわないですし、そのあたりはだいいが氣質が変わってきているのかなという感じがします。例えば、私が小さな頃は、親がネクタイを締めて会社に行く姿を見ると自分もネクタイを締めたと思うなど、大人の世界に憧れみたいなものを感じましたが、私の子どもを見ている限りどうも最近の子どもはそういうことはいないようです。そのあたりは大人の側にも問題があるのかなというふうにも感じますので、自ら省みる必要があるのかなと思ひます。

(会長)

みんな立派なホームページを作っていますけど、この頃の若い人々たちはこういうものになかなか参加しません。何に参加するかと言えばツイッターとかフェイスブックだとかそういうものの中から情報を拾ってくるのが多いので、ホームページだけでは行き届かないと思ひます。ここから隣の部屋にいる仲間に携帯で話をしていような若者もいるくらいですから、殊に私たちが情報を届けたいと思う若者に対しての網のかけ方をミスしているのではないかとか、もっといい仕方があるのではないかとかという気もします。

今度の審議会では、少しそういうことについてお話しいただきながら、せっかく作ったプログラムをよりよく発信できるよう助言していただければと思ひます。

(委員)

先ほどひきこもりの人たちの育ちの問題に対する質問がありましたので、少し触れておきたいと思います。

私はひきこもっている当事者に面接する仕事が多いのですが、彼らが面接にやって来るといことはかなり思い切ってやって来るわけです。その彼らと話をしていく中で顕著になるのは、小学校、中学校の時にしっかりと遊びきった子どもではないという特徴です。友達も比較的少なく、親との間ではどちらかと言うとお勉強とか行儀作法といったことを結構うるさく言われている。それがひきこもりの全ての原因だとは決して申しませんが、そういう育ちを経験してきたケースが多いです。

私は仕事柄、女子大の学生とよく話をしますが、今は普通の大学生でさえも本当に対人関係が下手で、人間関係のスキルが備わっていないような大学生が多くて本当にびっくりすることが多々あります。

家庭でどれだけ豊かな遊びを経験し、人間関係の中でいきいきと育つかということは、今の日本の子育て・教育の課題だと思います。それぞれの発達段階で、どれだけ仲間と遊び、どれだけ仲間と話し、どれだけ楽しかった体験が出来るかということが大事ではないかと思えます。

最後にもう一つ、神出学園に来ている子どもというのは、100%みんな自分がダメだと思っています。そういう子どもが入って来るのです。私が歓迎の言葉として入学者に話をする時に、私の顔を見ることもできず下を向いている子どもが圧倒的に多いのです。最近ではあまり見かけませんが、かつては入学式の時に、女の子では髪の毛を全部前に下ろしたり、男の子では帽子のつばを深く下ろして絶対に取らなかつたりというような子どもがいました。後でわかったことですが、なぜこのような行動をするかと言うと、学校に行けなくなったこんな私には人に見せる顔ではないのだという意識があるということです。そういう子どもたちを私たち神出学園は受け止めているのですが、その子どもたちが2年間の中で本当に変わっていきます。

それはなぜかと言うと、神出学園のプログラムにも関わってきますが、スタッフが徹底的にありのままを受け止め、どんな小さな事でも褒めるのです。やはり子どもは褒められたら嬉しいものです。若いですねって言われると私だって嬉しい。これは大人も同じだと思います。子どもたちが小さな時にいろいろな機会から大人からそういう喜びをかけられるということは、やはり自己肯定感につながっていくと思います。

慶応大学の河地先生が4ヶ国の自己肯定感の比較調査をして、先ほどのお話にも出ていたように、約60%の日本の子どもたちは自分をダメだと思っているということです。そういう数字が出ていの中で、やはり子育てや教育の際に、子どもたちがどうしたらいきいきと元気になったかということ、もう一度私たちは振り返り、それぞれの発達段階で子どもたちを受け止めることができればと思います。

(会長)

ありがとうございました。それでは終わらせていただきます。